

2017年5月23日

守永直幹氏の「生命と象徴」論に答える

村田 晴夫

守永さん、「生命と象徴」、大変興味深く読ませていただきました。こんなに丁寧で、かつ分量も多い論評を、正直、期待していたわけではありませんでした。昨日、これを読みまして感銘、大いに刺激を受けました。それでいくつかのことを書きたいと思います。

守永さんの「生命と象徴」論は、大きくは三つの論稿から成っています。

- 1) 「生命有機体 VS 機械状生命体」、
- 2) 「象徴作用——社会的統合の紐帯として」、
- 3) 「象徴転移とはなにか」 です。

これら三つの部分は、もちろん相互に関連しているのですが、関心の所在にはそれぞれの焦点があって、分割されています。

それで私も、それぞれについて、論じて行きたいと思います。

1) 「生命有機体 VS 機械状生命体」

現代を支配しつつある文明、現代文明は、守永さんが指摘されるように、「機械化が人間の内面にまで及ぶ」ような勢いのものであります。AI がそれを予感させます。

そうして、それら現代文明を導き出したのが、守永さんが強く注意された「標準化」ということでもあります。それを定着させたのがテイラー、フォード、であるということ。テイラーは機械技師でした。20世紀の初頭、F. W. Taylor による科学的管理論の成立、これこそ新しい文明の相貌が開かれた時でした。そしてまた、アメリカ経営学の始まりでした。

私は、この新しい文明の相貌の現われを担い、推進したのが「企業」であって、それによって導かれてきた「企業文明」であったと主張したわけです。

技術革新が起こり、機械技術からさらに、原子力技術、そして情報技術、生命科学技術が開かれたのがこの20世紀の前半からのことであり、それが後半、第二次大戦後に急速な進展を見せました。

守永さんの論考に戻ると、守永さんは「有機体と機械が融合する」という表現で述べられます。「有機体と機械が融合する」ということ、これはマックス・ウェーバーが『職業としての学問』で語っているように、電車がどのような仕組みで動くのか、知る必要はない。人はただ、電車が何時にここに来るのか、何時に何処へ向かうのかを知っているだけでよいのだ、ということに対応します。「融合」というのがどういう意味なのか、そこに問題が含まれていると思います。

機械、あるいは機械文明、が人間社会に浸透して行くのですが、その浸透の仕方が、その文明の主体性を人間の側が握った上での浸透であれば良いのですが、いつのまにか逆転して、人間が機械文明にとりこまれて、それに従属することになるとき、「具体性置き違いの文明」が姿を表すのだと思います。

ウェーバーと対照的に、ホワイトヘッドは、チャーリングクロスの鉄橋が、昔日の河口の面影を破壊して行くことを、嘆きの姿勢で取り上げます（SMW, 第13章）。

ウェーバーにもホワイトヘッドにも、「有機体と機械が融合」という現実を見る眼差しがありますが、それを眺める姿勢には相違するものが感じられましょう。

その違いこそ、もしかしたら、「機械」すなわち合理主義と「有機体主義」を分かつ分水嶺かもしれません。Zauberを追放して、徹底的に合理主義への道を進むこと——これがすなわち近代合理主義としてついこの間までわれわれがともに評価していた道でした——を評価するのか、象徴の自己組織化システムを認めてそれに信頼を寄せるのか、二つの道は大いに異なるものでしょう

2) 象徴作用——社会的統合の紐帯として

このテーマに正面から向き合ってください、お礼申し上げます。

私も昨日から、ホワイトヘッドの *Symbolism* を読み直しています。

守永さんは「(*Symbolism* 第3章) 象徴作用こそが社会の紐帯だと証明せんとしている」と言われます。まことにその通りでありましょう

「本書での主題は社会的統合の紐帯としての象徴作用の意味と機能であり、第一次大戦後に顕在化したヨーロッパ社会、ひいては近代社会の危機をいかに乗り越えるか、この課題が何よりもホワイトヘッドの念頭にあったと思われる」と書いてくださいましたが、卓見でしょう。

第一次世界大戦の経験と平和への思い！

守永さんは、ここでホワイトヘッドに並んで、ベルクソン、ハイデガー、日本の京都学派、さらにもっと後の世代のフリードリヒ・ハイエクや、カール&マイケル・ポラニー兄弟を挙げておられます。これらは大変興味のある思想家のリストですね。

一見雑多なリストですが、第一次大戦の深刻な影響と、その後の20世紀思想の行方という観点から、このリストの共通項が見えてきます。しかしもしもそうならば、フッサールは、フロイトは、という余計な気がかりも湧いてきますね。

フッサールも第3節徴転移論で出てきますし、フロイトについては、別の文脈（ベルクソンの『二源泉』）で取り上げておられますが、そうならユングはどうなりましょうか。

ホワイトヘッドとベルクソンの『二源泉』との比較も、この際、興味深くかつ重要でありましょう。そしてその課題もまた、守永さんはしっかりと意識しておられます。

生命をいかなるものと捉えるのか、この問題に関してホワイトヘッドは *Process and Reality* で縷々述べるのですが（第二部第3章「自然の秩序」特にその第6、7節）、そのエッセンスを語ったのが守永さんの次の文章でしょう。

「社会生活というものが高等な有機体の到達点であるような偏見は退けねばならぬ。ホワイトヘッドはそう強調します（p.64）。たんに個体や社会が存続することのみを至高の価値とするのであれば、8億年も存在してきた一箇の岩石のほうが人間社会より遥かに価値あるものになってしまう。われわれはたんに生き延びるために生きているのではない。長生きするためだけに寿命が与えられているのではない。」

有機体という観点からすれば、生命の創発（*emergence of life*）を自由への希求と考えたほうがよかろう。それは自己の利益や活動を伴う、個性の一定の独立への希求である。こうした希求を、ただ単に環境から強いられたものと見なすべきではない。（p.65.）

たんに生き延びるためであるなら、生命が創発する必要はなく、無機物にとどまっていればよかった。が、そこに自由への希求が生まれた。そして自由は大きな代償を必要とした。」

ベルクソン、そして先に言及しておいたフロイト、においては、「社会の目的」というものをカント的な超越論的・先験的なものではなく、「むしろそれは私たちの背後に、足下にある。始源こそが目的である」と守永さんは言われます。

ここが最も基本的で、かつ重要なところですよ。明晰なご指摘ですね。

3) 象徴転移とはなにか

守永さんのご指摘にある *Symbolism* のほとんど最終の頁に書かれたホワイトヘッドの文章、そしてそれにつけられた守永さんの日本語訳文、説得的です。さらに守永さんご自身の体験を入れ込んだ解釈も興味深いものですね。

象徴転移（*symbolic transference*）についてはこれまでももっと論究されていてもよかったです問題だと思われませんが、ここで守永さんが取り上げてくださったことは大いに価値がありましたよ。

私は、次の時代を切り拓くものとして、「時代の先取者」という視点を導入しました（前掲資料、参照。または拙著『管理の哲学』参照）。近代を切り開いた先取者として私が挙げたのは、17世紀ホッブズ、18世紀スミス、19世紀マルクス、20世紀にマックス・ウェーバーとバーナードです。

このような時代の先取者理論は象徴転移理論によってより積極的に展開できるでしょう。21世紀の心性を考えると、大きな役割を果たすものとなる可能性を感じます。

今後を期待します。

まとめ

私は、1)「生命有機体 VS 機械状生命体」に対する先のコメントで、「有機体と機械が融合する」とはどういう状況なのか、という問題を提起しました。

ここで主体性の問題が登場してくると思います。機械という「具体性置き違いの文明」であっても、それが人間を主体とする *Concrescence* の中に位置づけられているならば、「具体性の置き違い」は起こっていないのです。

それが先の研究会で主張したかった私の論のポイントです。時間が無くてここまで行かなかったのが残念ですが・・・。

幸い、守永さんが適切に提起してくださった問題「生命有機体 VS 機械状生命体」こそ、この主体性を論ずる場でありましょう。

そしてさらに、象徴作用と象徴転移という問題領域が提起されました。

ホワイトヘッドの哲学において基本的なこととして次に引用するような主体 - 客体の観点が
あります。

「現実的実質（アクチュアル・エンティティ）は次のような経験の主体としての過程である。すなわち、山本誠作の表現を借りれば「被限定即能限定」と言われるように、現実的実質は先ずそれが置かれてある世界によって作られてあるものであり、その限定されてあることが即ち自己を自ら限定して行く主体性の創発であって、目的論的に自己を生成する。そうしてその過程が満足に達して自己を客体化して他の生成の過程に差し出すのである。これはまた、物的極と心的極の統合であるとも表現されるが、無機物においては心的極が限りなく零に近いであろう。だがそれも含めて有機体なのである」（村田「文明と経営、その哲学的展望に向けて」当日の資料、31頁）

これらの諸問題を統合的に論じて行く方向性、このことを考えたいと思います。それらが「企業文明」とまた「文明と経営」という問題領域においても、結びあう知見が得られるように、努力したいということ、これが今の私の目的であり、願いであります。守永さんが提起してくださった「象徴」の問題はそれを助けてくれるであります。

有り難うございました。

2017年5月23日

村田 晴夫